

竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER

その夢は、きっと世界を変えていく。
The dream surely changes the world.



Contents



第48回交流会レポートより

- P.2 「現在の夢」、お礼の言葉
- P.3 第48回交流会レポート
- P.7 令和七年度新入生紹介
- P.9 竜の子近況報告
- P.13 竜の子(OB・OG)近況報告
- P.14 SPECIAL REPORT I
- P.15 SPECIAL REPORT II



タイのドンキモール

- P.16 編集後記



公益財団法人 竜の子財団

第 35 号
Aug. 2025

現在の夢

オウ カネイ
王 佳寧

——架け橋としての研究者を目指して——

2016年来日。
2018年～2023年に竜の子財団奨学生。
2019年に北海道大学大学院教育学院修士課程修了。
2023年には同大学にて博士課程を修了、教育学の博士号取得。
2023年に中国教育科学研究院 教育評価と督导研究所に研究者として着任。

2016年、私は日本に留学しました。慣れない土地での生活、言葉や文化の壁に戸惑い、不安や孤独を感じる日々もありました。2018年に竜の子財団の奨学生として選ばれ、経済的な支援に加え、温かな励ましと心の支えをいただきました。異国で学ぶ留学生にとって、それは何よりも大きな力でした。竜の子財団のご支援のおかげで、私は安心して学問に打ち込むことができ、無事に博士課程を修了することができました。

現在、私は北京にある中国教育科学研究院に所属し、教育政策に関する研究に従事しています。中でも特に力を注いでいるのが、日本・中国の比較教育です。日本で得た知見や、人との出会い、そして竜の子財団からいただいた温かい応援は、今も私の研究の原動力となり続けています。昨年は、当院の副院長に随行して、日本の文部科学省、国立教育

政策研究所、京都大学などを訪問し、教育政策の最前線に触れる機会を得ました。また、未来の学びの場づくりに取り組む企業・内田洋行も訪れ、AIやICTといった先進技術を取り入れつつも、「人と人とのつながり」を何よりも大切にする教育改革の姿勢に、深い感銘を受けました。その訪問を通じて、国境や文化の違いを越えて、教育がいかに人と人とを結びつけ、理解を育む強い力を持っているかを、改めて実感しました。今後も、教育を通じて日中両国の対話と協働を促す研究を続けていきたいと考えています。制度や政策の比較にとどまらず、現場の声に丁寧に耳を傾け、子どもたち一人ひとりの学びの姿に向き合いながら、両国の教育の未来をともに構想していく「実践に根ざした研究」を追求していきたいのです。

かつて、ひとりの留学生だった私は、多くの方々に支えられて今ここに立っています。これからは、自分が誰かの背中をそっと押せる存在になりたい。教育を通じて、人と人、国と国をつなぎ、理解と共創の場を広げていくことが、今の私の夢です。



(内田洋行訪問時の写真（本人は左から2番目）)

ご寄付いただいた皆様へ

この度は、竜の子財団の奨学生を代表し、ご寄付いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

私たちはそれぞれ実現したい夢を抱えて、日本へ留学してまいりました。ご寄付いただいた皆様と竜の子財団の方々のおかげで、経済的に負担なく、夢を追うことに専念することができました。また、財団が用意してくださった交流会等を通して、日本文化への理解を深めることができています。更に優秀な仲間にも恵まれるだけでなく、OBOGの方々と接する貴重な機会もいただけて、刺激を受けながら、日々充実した留学生活を送っております。

皆様のご厚意を力に変えて、今後も全力を尽くして夢を追っていき、社会に貢献できるように努力してまいります。最後に、皆様のご支援を改めて深く感謝申し上げます。

(令和7年度竜の子奨学生 東京大学 楊 雨琦)

第48回交流会レポート

● 第19回贈呈式 ●

令和7年3月19日（水）、東京・京王プラザホテル・アンサンブルにて第18回卒業式及び第19回贈呈式が開催されました。第18期は5名の留学生が卒業する日を迎えました。第19期は5名の留学生たちが、新たに竜の子財団の一員として加わりました。巣立っていく卒業生及び新入生に向けて、秋元理事長からの式辞をいただきました。楊雨琦さんが新入生を代表して、感謝の気持ちと竜の子の一員としての決意について話しました。

理事長挨拶 秋元理事長

卒業生の皆さん、おめでとうございます。本日はこのあとの懇親会もありますので、フランクに、和やかな懇親会を進めるよう、少しお話をさせていただきたいと思います。

新しく奨学生になられた皆さん、竜の子財団は特徴があります。これは毎年お話していることですが、当財団は奨学金を支給するだけではなく、交流会を年に2回行っています。皆さんのお手元には会報誌がありますがこの会報誌はなんと、既に34号です。読んでいただくと、交流会に非常に重きをおいているということが分かります。

また、今でも第1期生の方や卒業生の方との交流があります。そして何よりも嬉しいのが、財団を卒業された学生たちが、夢を果たし、豊かになり、今や寄付金までしてください。本当に嬉しいことです。皆さんにそうしてくださいということではありませんが、皆さんと、心と心の絆ができるアットホームな財団だと思っています。

数ある交流会の中でも、第1回から継続して実施してい

るのが「日本の伝統文化体験」です。これまでに茶道を体験したほか、前回の交流会では伝統工芸の一つである「唐津焼」の制作体験を行いました。

また、スポーツを通じた交流も積極的に行っており、東京マラソンに参加して皆さんと一緒に走ったり、富士山登山にも挑戦してまいりました。さらに、相撲や柔道、空手といった日本の武道に触れる機会もありました。

季節に応じた活動も行っており、冬はスキー、夏は沖縄でのビーチバレーを通じて、参加者同士の親睦を深めてきました。

それから、なぜ1期生から現在に至るまで、竜の子財団と交流が続いているのかというと、4年に1度、OBOG会も開催しており（ちょうど来年が創立20年になるので）、そこに全員が集まることで縦のつながりが強くなると考えています。新しく竜の子奨学生になられた方々はこれから自分の夢を果たし、日本と母国との関係を深めて欲しいですし、また、現在勉強している分野で活躍していただける



式辞を述べる秋元理事長



奨学金目録を新入生代表の楊雨琦さんに授与する秋元理事長

ことを願っております。

また、それだけではなく、10年後も20年後も、皆さんとの心の絆を大事にしていきたいと思います。

そして編集委員の皆さん、編集作業など大変だったと思いますが、今回も素晴らしい会報誌を作成していただき、ありがとうございます。最後に毎年、卒業生に着物をご提供いただいている日本和装ホールディング様、この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

新入生代表挨拶 楊 雨琦

竜の子財団の皆様、卒業生の先輩方、そして新入生の皆様、こんばんは。第19回贈呈式の新入生代表としてご挨拶をさせていただきます、新入生の楊雨琦と申します。中国から参りました。現在、東京大学大学院情報学環・学際情報学府で社会学を学んでおり、今春から修士2年になります。

まず、秋元理事長をはじめ、竜の子財団の皆様に、心より御礼申し上げます。私の出身地は経済的に発展が遅れている地域であるため、修士1年のときに両親の負担を減らすため、同時に二つのアルバイトをしていました。もちろん、多くのことを学ぶ貴重な経験となりましたが、大好きな研究に充てられる時間が減ってしまいました。今回、竜

の子奨学金に採用されたおかげで、経済的な負担が軽減され、研究により一層専念できると思います。竜の子財団は、私の夢を実現するチャンスをくださいました。心より感謝申し上げます。

また、アジア諸国から集まった優秀な奨学生の皆様とともに、学び合い、積極的に交流しながら、微力ながらもアジア諸国間の友好関係の構築に努めてまいりたいと思います。学部時代は日本語を専門に学び、日中交流協会という、日中の大学生同士が交流するサークルに所属し、さらに大学3年のときに一年間、京都大学へ交換留学をしました。現在、所属している研究室でも、多様なバックグラウンドを持つ方々が集まり、言語や文化の壁を超えて交流する中で、日々刺激を受けております。このように、異文化交流の難しさを実感する一方で、その楽しさと大切さも深く理解してまいりました。今後もこの道を皆さんとともに模索し、国際親善のために尽力してまいります。

最後に、本日、このような素晴らしい交流の場を提供してくださったすべての皆様、そして親切に支援してくださった竜の子財団の皆様に、改めて深く感謝申し上げます。皆様のご期待に応えられるよう、日々精進してまいります。今後ともよろしくお願い申し上げます。



新入生を代表してスピーチする楊雨琦さん



新入生達の様子

(担当: 令和7年度竜の子奨学生 東京大学大学院 楊 雨琦)

● 第18回卒業式 ●

令和7年3月19日（水）、東京・京王プラザホテル・アンサンブルにて竜の子奨学生5名が竜の子財団を卒業する日を迎えました。卒業生は着物で入場し、秋元理事長からの式辞をいただきました。卒業生代表の挨拶で鄒可昕さんが寄付者および関係者の皆様へ心からの御礼を伝えました。

卒業生代表挨拶 ゾウ カシン 鄒 可昕

理事長をはじめ、竜の子財団の皆様、そして奨学生の皆さん、こんばんは。私は中国出身で、竜の子財団に5年間所属しておりました鄒可昕と申します。本日、このような素晴らしい卒業式において奨学生を代表してお話しする機会をいただき、心より感謝申し上げます。

私は京都大学大学院で研究を行ってまいりました。この留学期間中、特にコロナ禍という困難な状況においても、財団のご支援のおかげで経済的な不安を抱えることなく研究に専念することができました。また、財団が主催してくださる交流会を通じて、多様な国や分野から集まった優秀な奨学生の皆さんと出会い、大切な人間関係を築くことができました。

留学当初は言葉や文化の壁にぶつかることが多く、不安な日々を過ごしておりましたが、財団の皆様や奨学生の皆さんからの温かいご支援やご助言に励まされ、少しずつ前進することができました。特に、他の奨学生との交流を通じて様々なご経験を共有していただくことで、大きな勇気と学びを得ることができました。

この数年間の留学生活を通じて、私は研究者としてだけでなく、一人の人間としても大きく成長できたことを実感

しております。これまでに培うことができた知識や経験、そして人とのつながりは、私にとってかけがえのない宝物です。これらの貴重な経験は、これからそれぞれの道を行んでいく私たち奨学生にとって、人生の大きな糧となることでしょう。

本日卒業を迎える私たち奨学生一同は、竜の子財団からいただいた多大なるご恩恵を決して忘れることなく、今後はそれぞれの研究や仕事を通じて社会に貢献し、世界をより良い方向へ導いていけるよう精進してまいります。

最後になりましたが、これまでの温かいご支援に深く感謝申し上げますとともに、今後ともご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

乾杯の挨拶 加藤理事

19期生として新たに竜の子奨学生となられた5名の皆さん、本当におめでとうございます。皆さんのように優秀な方々をお迎えすることができ、当財団としても大変嬉しく思っております。そして、本日卒業される5名の皆さん、初めてお会いしたときから大きく成長されたお姿を拝見することができ、感慨深く思っております。

卒業生の皆さん、これから新たなステージでのご活躍を



卒業生スピーチを代表する鄒さん



乾杯の挨拶をする加藤理事

心よりお祈りしております。皆さんが当初そうであったように、常に夢を持ち続けながら様々な挑戦を重ねていかれることと思います。竜の子財団での学びを基本として、それぞれの分野で活躍できるような人になってほしいと思っています。

また、OBOG会なども開催しておりますので、ぜひここでお知り合いになった皆さんとの絆を、長い人生の中で大切に育んでいただければと思います。この素晴らしいご縁をいつまでも繋いでいただけることを心から願っております。

中締の挨拶

株式会社OKIプロサーブ 総務統括センター 岡 章元 様

私は約1万5千人の従業員を抱えるOKIグループの中で、サービスサポート部門であるOKIプロサーブに所属しております。そこで、プロモーション活動や展示会装飾、印刷物制作などを担当している約20名のチームの一員とし

て働いております。

竜の子財団との関わりは偶然から始まりました。「ちょっと手伝ってほしい」というお声がけをいただいたことがきっかけでした。当初、学生さんとの交流において、業者らしく形式的に接していたのであまり良い印象を与えられないのではないかと感じておりました。

そのような中で、私は竜の子財団の会報誌第2号から第34号まで制作に携わらせていただきました。この18年間を通じて感じたことは、学生の皆さんから直接お話を伺うことで、就職への不安や日本での生活における困りごとなど、様々な課題を共有できたということです。一人ひとりの学生さんとの出会いに、大切な思い出があります。

皆さんにお伝えしたいことは、この財団に集まっていることは当たり前のことではないということです。ここに集まっている理由をしっかりと考え、そのご縁に感謝し、次のステップへ進んでいただきたいと思います。ぜひ、この貴重な経験を今後の人生で活用してください。

最後に、新入生の皆さん、そして卒業生の皆さん、本当におめでとうございます。これからも頑張ってください。



中締めの挨拶をする
OKIプロサーブの岡様



理事長へ花束と千羽鶴を贈呈



第48回交流会開催の様子



毎年、卒業生は日本和装ホールディングス株式会社のご支援により着物を着て参加しています

(担当: 令和5年度竜の子奨学生 東海大学 庄 睿翔)

令和七年度新入生紹介「私の尊敬する人」

令和七年度の新入生5名をお迎えしました。

今回、新入生の皆さんには「私の尊敬する人」というテーマで、それぞれの思いを語っていただきました。尊敬する人物との出会いは、私たちの考え方や人生の選択に深く影響を与えることがあります。その人から受け取った言葉や姿勢は、自分自身を見つめ直すきっかけにもなります。ここでは、そんな大切な想いが込められた言葉とともに、新たな一歩を踏み出す5名をご紹介します。



ヨウ ウ キ
楊 雨琦
(中国出身)
東京大学
学際情報学府
社会情報学コース
修士2年

私の尊敬する人は、すごく身近な人ですが、自分の母親です。この間とある応募書類を書いた際に、母の仕事の履歴について聞かれて、働いて何年目ですかなどの質問だったと記憶しております。自分の母親なのに知らなかった情報だったので、母に尋ねると、1988年から働いたので今は30年を超えたということでした。一つのことを30年以上もずっとやってきたって、どういうことかと考えれば考えるほど、尊敬する気持ちが湧いてきました。出身は中国のド田舎で、母はそこで小さな金物屋を営んでおり、農家がよく使う道具と資材を販売しております。とても地味な商品ですが、よく考えると、地元では結構重要で欠かせないものでもあります。

それらのものは割と重い物が多く、普段は父も搬送したり手伝いしますが、大体の場合、母がワンマンで店を支えており、ある意味、地元を支えているとも言えるでしょう。精神的にも体力的にも、この逞しさは尊敬するところの一つです。私は現在、「立派な研究者になる」という夢に向けて努力していく中で、その大切さをますます痛感しております。研究という道は長くて、蓄積不足やプレッシャーなどで落ち込んだり、焦ったりしがちな人間ですが、そういうとき、大好きな母のことを思い出すと、何故か心強くなります。もう一つ尊敬するところは、いつも前向きであるということです。研究に限らず、生活上の悩みなどで行き詰まった時によく母に相談します。すると、「難しいからこそ楽しいんじゃないの」って返答してくれます。時々そういう軽さにすこしイラッとするのは正直なところですが（笑）、ただ落ち着くと、たしかにそうだねと心から同意します。研究でも、生活でも、あるいは人生もそうかもしれないですが、困難と向かいつつある中でも、面白さや楽しさは徐々に増していきます。

夢を追うことはなかなか勇気の要ることですが、このような尊敬する母のおかげで、どんどん挑戦できると思っております。大好きな母の健康や幸せを願いながら、これからも頑張張りすぎないように努めます。



**ジャヤスーリヤ
ムディヤンセーラーゲ
ヌラーシャー
インドウミニ
ジャヤスーリヤ**
(スリランカ出身)
早稲田大学
社会科学部

私の尊敬する人は、霊長類学者であり環境保活動家でもあるジェーン・グドールです。彼女はイギリス出身で、幼い頃から動物に強い関心を持ち、単身でアフリカに渡り、チンパンジーの観察を始めました。彼女の研究は、チンパンジーが道具を使い、複雑な社会的行動をするという、これまでの常識を覆す発見をもたらしました。また、グドールは、学士号を取得することなく博士号を授与された、極めて稀な人物の一人です。16歳の時、偶然彼女のTEDトークを視聴したことが、グドールを知るきっかけでした。その頃は彼女の何を何も知りませんでしたが、静かにステージへ歩み出した瞬間、会場全体が一瞬で静まり返りました。話し始めると、その声に確信が宿り、まさに専門家としての風格を示していました。まるで聴衆が彼女の一言一句

を待ち望んでいるかのような空気でした。そのとき私は、「自分も何か独自に見つけたことについて人々と語り合える専門家になれるといいな」と思いました。私が彼女を尊敬する最大の理由は、「知識」よりも「共感」を大切にしている姿勢です。彼女は動物を研究対象としてではなく、ひとつの「いのち」として対等に接しようとした初めての研究者の一人です。例えば、彼女は観察対象となる多数のチンパンジーに名前を付けることで個体識別を行っていました。そして、チンパンジーの社会秩序に干渉しないよう、常に細心の注意を払っていました。彼女の業績は非常に印象的で、まさに非凡な人物だと思います。今の彼女は「Roots & Shoots」というプログラムを通じて世界中の若者と協力しており、このプログラムの目標は若者の環境活動に力を与えることです。

私は現在、社会問題や環境問題に関心があり、将来的には政策や教育を通してより良い社会をつくる仕事に携わりたいと考えています。ジェーン・グドールのように、どんな立場や背景でも、強い信念と行動力があれば世界に良い影響を与えられると思います。その夢までの道を作りたいという思いが今の私の原動力です。



リュウ ジョウミン
劉 常民
(中国出身)
東京藝術大学
美術研究科
文化財保存学専攻
博士2年

が大好きに違いない」と思い込んでいました。小学2年生からデッサンを習い始め、高校3年生になるまで続けてきました。すると、「ここまで来て美大を目指さないなんて、今までの努力が無駄になってしまうよ」と言われたのです。得意だから、または多くの時間と労力を費やしてきたから、やるしかない。でも、それって結局、一種の“縛り”なんじゃないでしょうか。ですから、単に「得意だから」「長く続けてきたから」ではなく、本当に自分の意志で生きようとしている人たちを、私は心から尊敬しています。それは、スポーツ選手でも、大学教授でも、政治家でも、スナックのマスターでも、トランスジェンダーの方でも構いません。どんな職業や立場であっても、「自分が望む生き方をしている人」は、私にとって尊敬に値する存在です。

私も今、自分の意志を貫いて生きられる人間になれるよう、少しずつ歩みを進めています。それこそが、私の目指す生き方であり、夢なのです。



ナディレ イスラムジャン
NADIRE SILAMUJIANG
(中国出身)
京都大学
経済学研究科
経済学専攻
修士2年

て、学生の何気ない発言にも真剣に耳を傾けてくださるその姿勢からは、学問と学生の両方に対する深い愛情を感じます。ある日のゼミでは、一人の学生が自分の質問をうまく言葉にできず、困っていました。すると教授はその学生の表情や雰囲気から意図を汲み取り、「それって、こういうこと？」と優しく言い換えて導いてくださいました。その瞬間、学生の表情がぱっと明るくなり、「そうです！」と笑顔でうなずいていた光景が忘れられません。知識だけでなく、人の気持ちにも敏感であろうとするその姿に、心から尊敬の気持ちを抱きました。

また、「学問とは、一生をかけて問い続ける旅なんだよ」と語る教授の言葉が、今でも強く心に残っています。どれほど経験を重ねても、「もっと知りたい」「まだ知らないことがある」と語るその姿は、学び続けることの尊さを私たちに教えてくれます。新しい論文や本に出会ったときの教授の目の輝きは、まるで子どものように純粋で、知への好奇心が年齢や立場を超えて続いていくものだというのを教えてくれました。そんな教授の背中を見ていると、自分もいつか誰かにとっての「きっかけ」になれるような存在になりたいと思います。人の可能性を信じ、知ることの喜びを共有し、学びを通じて次の世代とつながっていくこと。それが、私のこれからの夢です。



シュウ ベイウェイ
周 沛韋
(台湾出身)
京都大学
農学研究科
生物資源経済学専攻
修士2年

ようになりました。お母さんは専業主婦で、家のことを全部見てくれています。僕の勉強や気持ちのこともいつも気にかけてくれて、困った時や落ち込んだ時には、一番に気づいてくれて、優しく話を聞いてくれます。お母さんは「失敗しても大丈夫。努力すれば、いつか必ずうまくいくよ」と言ってくれて、その言葉が僕の心の灯りになっています。両親は言葉だけでなく、行動でも僕を支えてくれています。中学校の時に韓国からの交換留学生を受け入れた時も、高校の時に日本との交流活動に参加した時も、いつも応援してくれました。新しいことをやるたびに、励ましてくれて、自信を持たせてくれるんです。僕が成長していく中で、両親は一番の支えでした。彼らの愛と支えがあったからこそ、困難に負けずに挑戦し続けることができました。両親から学んだことは、諦めない心、自分を律すること、そして感謝の気持ちです。家族の大切さも強く感じています。

将来は、両親のように責任感があって、優しい人になりたいです。両親から教わったことを活かして、社会のために役に立つ人間になりたいし、困っている人を助けたいと思っています。そうして、両親への感謝の気持ちを形にして、誇りに思ってもらえるようになりたいです。

竜の子近況報告



発表を終えた後、道頓堀を観光しました

ニムラウィー ナッタパット

Nimrawee Nattapat (タイ)

九州大学

「大阪で学会に参加しました」

皆さん、こんにちは！最近はいかがお過ごしでしょうか？

私はというと、学業でとても忙しい日々を送っています。今年が卒業前の最後の学期です。今年の3月には、大阪で開催されたISCS 2025という学会に参加し、自分の研究について発表してきました。同じ分野に関心を持つ研究者の方々と交流し、意見交換ができたことは本当に素晴らしい経験でした。

その後は就職活動と卒業論文の執筆で忙しくしていましたが、嬉しいことに就職活動が無事に終わり、10月からは広島 Micron Memory Japan で働くことが決まりました！



バジル

ジャヤスーリヤ ムディヤンセーラーゲー ヌラーシャー
インドゥミニー ジャヤスーリヤ (スリランカ)

早稲田大学

「バジルを育てています」

最近、友人からバジルの鉢植えをもらい、とても夢中になっています。バジルは成長が早く、お世話も簡単なので、初心者私にはぴったりの植物です。前からベランダでガーデニングをしてみたいと思っていたので、バジルは良いスタートになりました。

私はバジルの上の部分を取り、水に挿して、もう一つのバジルを育てようとしています。最近、その挿し木にやっと根が出てきて、とても嬉しいです。これから料理をするときに、自分で育てたバジルを使えるのが楽しみです。今学期は忙しいですが、私のバジルの成長する様子を見ることで癒されています。



大室山を歩く人々

チョン ルイシヨン

庄 睿翔 (マレーシア)

東海大学

「大室山に行ってきました」

この間、静岡県伊東市の大室山に行ってきました。リフトで山頂に登ると、360度のパノラマが広がり、伊豆七島も見えました。山頂の約1kmの散策路を一周し、圧倒的な景色に感動しました。冬の風は冷たかったですが、寒さに耐えつつ写真を撮りました。カメラでは歩く人々がミニチュアのように見えてとてもかわいらしかったです。今回で二度来ましたが、伊豆の景色をゆっくり楽しめ、また来たいと思いました。



京都の下鴨神社で行われる葵祭

シュウ ベイウェイ

周 沛韋 (台湾)

京都大学

「京都の葵祭を見に行きました」

新学期が始まり、授業を受けながら論文を書いているので、毎日とても忙しく過しています。忙しい中でも、しっかり休むことはとても大切で、心身の健康を保つために欠かせません。

写真は京都の有名な「葵祭」の様子です。葵祭は京都三大祭りの一つで、毎年5月15日に盛大な伝統行列が行われます。行列は京都御所を出発し、下鴨神社を経て上賀茂神社まで、約8キロの道のりを進みます。その壮大な光景から、日本の伝統文化の魅力を肌で感じることができ、とても貴重な体験になりました。皆さんも機会があれば、ぜひ実際に見に来てください！

「ちょっと気分転換に、お台場をぶらり」



台場公園から眺めたレインボーブリッジ

カク クンピョ
郭 錦表 (韓国)

東京科学大学

私は最近、論文の投稿や博士論文の執筆、就職活動などでバタバタしています。
先日、日本での留学生生活を終えてドイツに帰国する友人がいたので、お台場でバーベキューをしたり、周辺を散策したりしました。
お台場には、本当に景色がきれいで素敵な公園がたくさんありました。特に潮風公園は、噴水で遊べたり、周りでのんびり過ごせたりしてとても良かったです。将来、自分に子どもができたらずいぶん連れてきたいなと思える公園でした。
また、台場公園はお台場の中でも少し隠れた場所にあり、かつて黒船を迎え撃つために築かれた砲台の遺構も残されていて、「お台場」という地名が、もともとその砲台がある場所（台場）に由来していることを知って、とても興味深く感じました。
さらに、レインボーブリッジをすぐ近くで眺めることができる絶景スポットでもあり、迫力ある景色を楽しめました。
お台場に行く機会があれば、ぜひ立ち寄ってみたい場所です。



APSMCCビジネスケースコンペティションに参加した私たちのチーム

ワナ ホン
Wunna Hone (ミャンマー)

立命館アジア太平洋大学

「忙しいけど楽しい今学期」

私はというと、卒業論文の研究に取り組み始めたこともあり、日々があっという間に過ぎていきます。今学期は国際ビジネスケースコンペティションにも参加しており、充実した毎日を送っています。
また、2月には北海道にも旅行に行ってきました。良いリフレッシュになりました。気温が高くなる日が増えてきましたので、どうぞご自愛ください。



花が綺麗に咲いているムーミンバレーパーク

ヨウ ウキ
楊 雨琦 (中国)

東京大学

「郊外旅行」

だんだん暑くなってきた夏を感じがしてきましたね。
申請書類や修士論文の構想発表などに追われる中で4月はあっという間に過ぎました。研究のことばかり考えていて行き詰まった時に、親友から「旅行でも行きませんか」との誘いがありました。お言葉に甘えて一緒に埼玉県のもみ谷公園に行きました。緑いっぱいでも静かなところで、すっかり癒やされました。やはり時々東京脱出が必要かもしれませんね。



親戚と囲む食卓

セキ カンシン
戚 涵欽 (中国)

東京電機大学

「GWの帰省」

今年のゴールデンウィークは久しぶりに中国へ帰省しました。親戚たちと会い、食事をしながらおしゃべりして、にぎやかなひとときを過ごしました。写真はそのときの食卓です。懐かしい味の料理をたっぷり味わい、大満足でした。ただし、帰省中の一週間で体重が2kg増えたことは内緒です（笑）。就職先の話も両親とじっくり話せて、応援の言葉ももらい嬉しかったです。気持ちを新たに、研究に集中して頑張ります！



研究室の
食事会

クー セラ
具 世羅 (韓国)
東北大学

「忙しい今学期」

私は少し忙しい時期を過ごしています。4月には2本目の論文を投稿し、新たな研究テーマにも取り組み始めました。この内容で今年の学振に応募することになり、本当に大変でした…。

来年は早期卒業を予定しているため、単位を補う目的で、7月に集中講義を受けることにしました。8月には国際学会で発表を行う予定です。とても心配になりますが、頑張っていきたいと思っています。皆さまもどうかお体に気をつけて、一緒に頑張りましょう！



50円で買ったMr.Beanの熊

ソウ チョウ
宋 兆 (中国)
一橋大学

「フリーマーケットに行きました」

5月に、私は大井競馬場で開催されている『東京シティフリーマーケット』に行ってきました。朝の爽やかな空気の中、友人と一緒に出かけました。会場に着くと、色とりどりのテントが並び、さまざまな商品が目飛び込んできました。

古着やアンティークの食器、手作りのアクセサリなど、どれも魅力的で、つい時間を忘れてしまいました。特に、昭和レトロの雑貨に心惹かれ、思わずいくつか購入しました。出店者の方々との会話も楽しく、商品の背景や思いを聞くことができました。

最後には、美味しい屋台の食べ物を楽しみながら、素敵な一日を過ごしました。人生初のフリーマーケットの体験はいい思い出になりました。



奥多摩にある
百尋ノ滝

リュウ ソハン
劉 楚帆 (中国)
筑波大学

「気分転換に奥多摩に行ってきました」

私は最近、博士論文をまとめている最中で、いろいろバタバタしているところですが、ゴールデンウィーク中に、気分転換として奥多摩に行きました。

本格的な山登りには体力が不安だったので、山頂までは行かず、川苔山の登山コースにある百尋ノ滝だけを見てきました。

帰った時はとても疲れましたが、豊かな自然を楽しめたおかげで、心が癒されました。日帰り旅行のスポットとして、とてもおすすめです。



屋久島の朝

ジョ モヨウ
徐 萌陽 (中国)
九州大学

「新学期、充実の日々」

最近是非常に充実した日々を過ごさせていただきました。数ヶ月間準備に励んでいた学会発表を終え、ほっと一息ついているところです。国際会議に参加する機会をいただき、大変勉強になりました。

会議の後は、心身のリフレッシュのため屋久島へ旅行に行っていました。豊かな自然の中でゆっくりと過ごし、良い気分転換となりました。現在は福岡に戻り、再び学業に集中しております。最近、卒業論文の執筆と博士課程の申請準備で忙しくしております。やるべきことがたくさんありますが、一つずつ着実に進めているところです。

皆さんもそれぞれの場所で学業に励んでいらっしゃるかと存じます。またお会いして、近況をお話しできるのを楽しみにしております。



疲れすぎて
USJで
寝ちゃった

ヨウ カイブン
叶 楷文 (中国)
名古屋大学

「学会と論文の日々、そしてUSJでのひと休み」

私はというと、学会の準備や論文執筆などでバタバタしていて、気づけばもう何ヶ月も経っていました。そんな忙しい日々の中、ゴールデンウィークに中国から友人が日本に遊びに来てくれて、久しぶりにリラックスすることができました。一緒に大阪のUSJに行ったのですが、スケジュールがぎっしりで、めちゃくちゃ疲れてしまい…なんと、スタジオパーク内でぬいぐるみハットを被ったまま少し寝てしまいました（笑）。その姿があまりにも面白かったので、この写真を選びました！



比叡山の
山頂からの
景色

ナディレ イスラムジャン
NADIRE SILAMUJIANG (中国)
京都大学

「新たな一步を踏み出す準備ができた」

今学期は、授業と研究の両立で充実した日々を過ごしています。6月下旬にはベルギーで開催された国際学会に参加し、27日に発表を行いました。さまざまな研究者との交流やフィードバックを通じて、多くの学びと刺激を得ることができ、非常に有意義な経験となりました。最近は暑くなってきたので、気持ちを整えるために毎日の瞑想と週末の登山を始めました。自然の中で過ごす時間は心を癒やしてくれます。皆さんにもぜひおすすめしたいです！

「こんなことありました」



石破佳子様に僕が描いた絵をお渡しする瞬間、目の前の男性ではなく、なぜか後ろで何かを探していた変な人——それが僕です。

リュウ ジョウミン
劉 常民 (中国)
東京藝術大学

4月に、藝大の留学生代表として、中国大使館で開催された「シルクロード」に関する招待宴会に参加しました。会場では、日本に滞在している各国の大使や日本の政治家の方々に向けて、敦煌壁画の伝統的な制作技法を紹介するブースが設けられ、興味のある方には体験もしていただけるコーナーもありました。

そこになんと首相夫人の石破佳子様がご来場され、私が描いた石窟の天井装飾をご覧になって、「これがとても好きです」とおっしゃってくださいました。

その絵は、感謝の気持ちを込めてプレゼントとして、石破佳子様にお納めいただきました。

4月を過ぎてからというもの、学業が一気に押し寄せ、学会発表に博士研究、そして各地での調査と、まさに目の回るような日々が続いています。そんな中、山形県の慈恩寺にて、11年ぶりにご開帳される本尊・弥勒菩薩像の展示設営にも携わりました。この弥勒菩薩像は、通常は拝観できない秘仏であり、今回のご開帳は大変貴重な機会となっております。

仏像や歴史にご興味のある方は、ぜひ足をお運びいただき、ご覧いただければ幸いです。

竜の子(OB・OG)近況報告



八ヶ岳で取った家族写真

パク ハリン
朴 夏林 (韓国)

東京工業大学卒

「大学院卒業から8年経ちました」

お久しぶりです。大学院在学中は大変お世話になりました。

おかげさまで、卒業後は日本で企業に就職し、結婚・出産を経て、現在は2児の母となりました。社会人としては8年目になります。一度の転職を経て、現在は2社目の会社で在宅勤務と出社を組み合わせたハイブリッド勤務をしながら、日々育児に追われています。

毎日があっという間で、毎年近況報告の期限が過ぎてしまっていたのですが、今回はなんとか間に合うように頑張りました。

これから夏がやってきて、疲れやすい時期になるかと思いますが、お仕事もお勉強も無理なさらず、どうかご自愛ください。



ノルウェーの
アーケシュフース城
にて

キン エキグン
金 奕群 (中国)

早稲田大学卒

「前向きに進めて、前向きに考えて」

皆さん、お久しぶりです。最近猛暑でたまに夜更かししますが、皆さんはお元気でしょうか。

近況とは言えないですが、一昨年の冬にUSCPAに合格しました。学生時代は、元々財務情報を中心に学習・研究を行ってききましたが、ぜひ一度実務に就いてみたいと思って、昨年の秋に学術機関から監査法人に転職しました。

繁忙期には想定外の忙しさを経験しましたが、私生活の面で家を購入するための融資がスムーズに下ったことは想定外のメリットでした。

前向きに進みましょう！



学生たちと
ティールームで
ひと休み

チャンポンバックディー インオン (タイ)

東海大学卒

「仕事と自分時間のバランスを大切に」

皆さま、ご無沙汰しております。最近はいかがお過ごしでしょうか。

私は昨年10月から東京農工大学の助教に着任し、4月からプログラミングの授業を担当することになりました。試験やレポートの採点に加え、7月の国際学会での発表や、10月のセッション担当に向けた準備・査読などに取り組んでいます。研究と教育の両立に励んでいます。

体調管理のためピラティスを始め、週2回ほど通っています。仕事と運動のバランスが取れ、充実した日々です。休日は研究室の学生と出かけたりすることもあり、気分転換にもなっています。

今後も研究・教育ともに前向きに取り組んでいきたいと思っています。



2025年7月にシンガポール開催の
国際産業エコロジー学会にて

チョウ セイヨウ
張 政陽 (中国)

東北大学卒

「疾走する助教の日常 ～研究、箏、ピラティスの三重奏～」

東北大学大学院環境科学研究科の助教として、2020年から研究と教育活動に追われながらも奮闘中です。「持続可能な資源循環システムの構築」という壮大なテーマに挑みつつ、金属資源の流れと環境影響を追いかける日々。研究の合間には、趣味としてお箏をボロンボロン弾き、マシンピラティスで筋肉に喝を入れています。仕事と生活の両立はまさに修行僧レベルですが、なんとか笑顔で乗り切っています。職場での真剣な顔と、ピラティスマシンで必死にバランスを取る顔のギャップを楽しみながら、明るい未来に向けて日々邁進しています。

SPECIAL REPORT I

● スリランカにおけキリ・アンマ・ダナヤ ●

午前4時だ。村がまだ暗闇に包まれているとき、いくつかの懐中電灯の明かりが動いているのが見える。7人が、一つの家に向かって進んでいる。まだ夜明け前にもかかわらず、その家の全員がすでに起きている。まもなく訪れる客人を迎えるため、準備に大忙し。床には長い敷物が広げられ、やって来る女性たちのための7つの席が設けられている。座席の前には、大きなバナナの葉が食事に用い置かれている。すべての準備は整っている。やがて、「キリ・アンマ」と呼ばれる7人の女性たちが到着する。これは「キリ・アンマ・ダナヤ」と呼ばれる儀式だ。

「キリ・アンマ・ダナヤ (Kiri Amma Danaya)」は、昔からスリランカ文化（特に仏教の人達の中）に根差しており、主にヒンドゥ教の影響から来た女神パッティニ (Paththini) 信仰と深く関わっている。この儀式が行われる理由はさまざまで、たとえば、伝染病が流行した際、家族の幸福を願う時、あるいは赤ちゃんが生まれた時などに、家族が女神に誓いを立てて実施することがある。女神パッティニは7つの姿を持つと信じられており、それにちなみ、儀式には7人のお母さん「キリ・アンマ」が選ばれる。かつては、キリ・アンマ達の選定には多くの厳しい規則があったが、現在ではその規則はあまり厳密には守られていない。一般的には、地域社会で信頼されている人物が「キリ・アンマ」として選ばれる。キリ・アンマが選ばれた後、家族は彼女らを正式に招待する。招待を受けた母親達は、儀式が行われる日まで（約1週間）肉を食べないようにする。

儀式は日の出前、つまり午前5時前には始まるので、キリ・アンマはその時間までに家に到着する。彼女たちの足を清めるためにターメリックとレモンを混ぜた水が入った洗面器が用意されている。彼女達の中、一番経験のある人が、リーダーとして女神パッティニの絵と「パッティニ・サランバ」と呼ばれる鈴の音がする足輪を持って来て、それらを仏像の隣に置く。その後、全員が用意されたマットに座る。これはプージャー（礼拝）の始まりである。そして彼女達は、「パッティニ・ハッラ」と呼ばれる歌を歌いながら、女神パッティニを招き、その加護を祈る。

料理は「キリ・アンマ・ダナヤ」の重要な一部である。この儀式のために、ミルクライスと様々な伝統的なお菓子が作られる。例えば、キリヤ（米

粉で作られたもの）、カウム、バナナ、ヤシ砂糖、キングココナッツなどが用意される。儀式が始まる前にこの食べ物を口にすることは禁止される。礼拝が終わると、ココナッツミルクをバナナの葉に振りかけ、その上に料理が並べられる。食前に、全てのキリ・アンマは食べ物を少量ずつ取り分け、それが他の神々への供え物として集められる。通常この供物は高い場所に置かれ、鳥などの動物たちがそれを食べるとされている。食後には紅茶やコーヒーを振る舞うのが習わしである。

その後、キリ・アンマ達はココナッツオイルの灯明を使って綿の芯7つを火を灯し、家族の一人ひとり、またその場に居る人々の頭の周りをくくると回し、その人達の健康と幸運を祈る。その後、芯はココナッツミルクを入れた器に投げ入れられる。ココナッツミルクには抗菌作用があるとされ、これもまた家の中の悪いエネルギーを取り除く象徴である。

最後に、「スートラ（経文）」が唱えられ、リーダーとして活躍するキリ・アンマがニーム、またはマンゴーの枝をターメリックと水を混ぜた液に浸し、それを家の周囲に振りかける。「キリ・アンマ・ダナヤ」は、もともと水ぼうそうなどの病気に対する加護を願う儀式として生まれたため、こうした抗菌性がある材料が頻繁に使われる。現在ではその意味が薄れてしまっているが、かつては病後の家庭を消毒・清めるための実用的な方法でもあった。

儀式が終わる時（約1時間）、キリ・アンマ一人ひとりにお礼としてギフトバスケットを渡す。最後に、彼女達は女神の写真、「サランバ」（鈴の音がする足輪）、食べ残しと贈り物を持ち、一人ずつ続いて家を出る。このとき、家族は手伝ってはいけないとされている。また、彼女達は自分の家に着くまで、後ろを振り返ってはいけないとされている。こうして、太陽が昇る頃、「キリ・アンマ・ダナヤ」が終了になる。

キリ・アンマ・ダナヤはヒンドゥ教と仏教の信仰が美しく融合したものであり、スリランカの多文化性を象徴するものだ。さらに、昔の社会には困難な時に人々が互いに支え合ったことも表している。現代のスリランカではこの習慣は一般的ではないが、人々を結びつけるこうした伝統は大切にし、守られるべきだと思う。



女神パッティニへの招待



女神パッティニの写真



キリ・アンマ達が家に到着するとき



ココナッツミルクを沸かしながら（これに米を入れるとミルクライスを作れます）

SPECIAL REPORT II

● タイ文化に息づく日本の影響 ●

タイと日本の関係は、歴史的に見ても長く、友好的なものです。近年、特にタイの若い世代を中心に、日本の文化が大きな関心を集めており、私自身の周りを見ても、その影響の大きさを日々感じています。本稿では、タイの日常生活に溶け込んでいる日本の文化について、いくつかの側面から探ってみたいと思います。

まず、最も分かりやすい例は「食文化」です。日本の食は、今やタイの食生活に欠かせない存在となっています。友人たちと「今日は何を食べようか」と話すと、ごく自然に日本食が選択肢に挙がるほどです。高級な寿司店から、ショッピングモールで気軽に楽しめるラーメン店まで、多種多様な日本食レストランがタイの至る所で見られます。特にサーモンを使った寿司や濃厚な豚骨ラーメンは、確固たる人気を築いています。また、シェフに料理を完全に任せる「おまかせ」というスタイルが受け入れられていることも、日本の食文化への深い信頼と関心を示していると言えるでしょう。



日本のチャーシューラーメンとタイのトムヤムクンを融合させたもので、まさにタイと日本の食の融合です

次に挙げられるのが、私自身にとって非常に思い入れの深い「ポップカルチャー」の影響です。タイの多くの人々にとって、日本のアニメや漫画は子供時代の大切な一部なのです。物心ついた頃から「ドラえもん」を見て育ち、「ドラゴンボール」の登場人物の必殺技を真似して友達と遊んだ記憶は、今でも鮮明な思い出です。これは私個人の体験だけでなく、世代を超えた共通の体験となっています。現在も「ワンピース」のような人気作品は多く



バンコクで毎年開催されるアニメコンベンション

の人を夢中にさせています。さらに、毎年バンコクなどで日本のアニメファンのための大規模なイベントも開催され、多くの若者がコスプレをして参加するなど、その熱狂ぶりは大変なものです。こうしたポップカルチャーが、私たちが日本という国に親近感を抱く大きなきっかけとなっていることは間違いありません。

さらに、日本の「ライフスタイル」や「美意識」も注目されています。例えば、シンプルで機能的なデザインを特徴とする「無印良品」の製品は、タイの都市部に住む人々を中



タイで人気の高級日本食レストランチェーンです。テーブルに着くまで常に行列で待たなければならないほどの人気ぶりです。

心に人気を集めています。その背景には、日本のミニマリスト的な美学、「わびさび」にも通じるような、簡素さの中に美しさを見出す価値観への共感があるのかもしれません。また、日本製品全般に対する「品質が高い」「安全である」という信頼感も、こうしたライフスタイルへの憧れを後押ししています。

では、なぜこれほどまでに日本の文化がタイで受け入れられているのでしょうか。その理由の一つに、タイが常夏の国であるため、日本の四季、特に雪景色に対する強い憧れがあることが挙げられます。また、清潔で安全な日本のイメージや、日本人のおもてなしの心も、タイの人々にとって魅力的に映っています。歴史的に長く良好な二国間の関係が、文化交流の土台となっていることも忘れてはなりません。

このように、食文化からポップカルチャー、さらにはライフスタイルに至るまで、日本の文化はタイ社会に深く、そして多岐にわたって根付いています。それは単なる一過性の流行ではなく、互いの文化への敬意と、私たちの子供時代の思い出のような個人的な体験に支えられた、深いレベルでの交流の表れと言えるでしょう。これからも、この興味深い文化の融合は、両国の友好関係をさらに豊かなものにしていくに違いありません。

(担当: 令和6年竜の子奨学生 九州大学 ニムラウィ ナッタパット)



委員長 東京大学 楊 雨琦

この度、「竜の子奨学生」第35号の編集委員長を務めさせていただき、無事に皆様へお届けできることを大変嬉しく思います。今回は「尊敬する人」をテーマに新入生の皆さんにご執筆いただき、近況報告と体験に基づくスペシャルレポートも掲載しました。

ご協力いただいた奨学生の皆さん、編集委員の皆さん、ありがとうございました。そしてご指導くださった編集のプロの方々に、心より感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

委員 東京工業大学 郭 錦表

この度、「竜の子奨学生」第35号の編集委員として参加させていただきました。私は、竜の子奨学生とOBOGの近況報告のコーナーを担当しました。近況報告は、現役の奨学生の出来事や趣味を知ることができるだけでなく、卒業された先輩方の生活やご経験に触れることができる、貴重な窓口だと感じています。そうした思いを込めて、竜の子の皆さんの近況をお届けできたことを嬉しく思い、とても楽しく編集に取り組むことができました。

委員 東海大学 庄 睿翔

この度は編集委員会に参加させていただき、誠にありがとうございました。

私は第48回交流会レポートの後半を担当させていただきました。文章を書くことに慣れない私にとって、今回の執筆はとても良い勉強の機会となりました。書き進める中で、日本語の表現についてあらためて考えることができ、貴重な経験になったと感じています。大変なこともありましたが、他の編集委員の皆さんと力を合わせて会報誌を作り上げることができ、嬉しく思っています。今回の経験は私にとって大切な思い出となりました。

委員 早稲田大学 ジャスーリヤ ムディヤンセーラーゲー ヌラーシャー インドゥミニージャスーリヤ

この度、「竜の子奨学生」第35号の編集委員会に参加させていただき、ありがとうございました。

私はスペシャルレポートを担当させていただきました。

もともと文章を書くことが好きなので、今回の執筆はとても楽しい経験でした。

自分の思いを言葉で表現する中で、改めて書くことの楽しさを実感することができました。

また、編集委員の皆さんと一緒に協力することも非常に楽しく、多くの学びと達成感を得ることができました。

このような素晴らしい経験をさせていただいたことに、心より感謝申し上げます。

委員 京都大学 周 沛韋

この度、「竜の子奨学生」第35号の編集委員を務めさせていただきました。今回が初めての日本語での誌面作りということもあり、不安もありましたが、編集を通して多くのことを学び、日本語力も大きく向上したと実感しています。原稿のやり取りやレイアウト確認など、普段の学生生活では経験できない作業ばかりで、とても貴重な機会となりました。何より、編集委員の皆さんと一緒に協力して一つのものを作り上げたことは、大きな達成感と喜びにつながりました。このような機会をくださった竜の子財団の関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

委員 九州大学 ニムラウィー ナッタパット

「竜の子奨学生」第35号をお届けする運びとなりました。本号で編集者を務めさせていただいた者として、今は安堵の気持ちと、この機会をいただけたことへの深い感謝でいっぱいです。

今号では私自身も、常々探求しておりました「タイに根付く日本文化」をテーマに、スペシャルレポートを執筆いたしました。情熱を注いできた事柄について、皆様に共有できる機会をいただけたことに、大きな喜びを感じております。本号の完成は、ご寄稿くださった奨学生の皆さま、そして未熟な私達をプロの視点から力強く支えてくださった編集者の皆様、そのお一人お一人のご協力なくしては叶いませんでした。この場を借りて、皆様に深く御礼申し上げます。



第一回編集会議



第二回編集会議



第三回編集会議



第二回編集会議後にて



「その夢はきっと世界を変えていく」

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている
その夢はきっと世界を変えていく 平和のため
いろんな事があるけれども どんなときでも

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に
夢 希望をかなえる為 みんなは生きている
その夢はきっと世界を変えていく かならず